

AAAA 大学 BBBB 図書館

訪問対応者：BBBB 図書館司書。（日本・コリア資料担当）

訪問者・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

以下、訪問調査結果と所見に分けて記します。

□訪問調査結果

1 コレクションについて

概要：BBBB 図書館 HP、同アーカイブズページ及び担当司書教示の『BBBB 図書館所蔵日本関係資料（1868 年以前）目録』と『BBBB 図書館所蔵和写本目録』を参照。

和古書（和装本など）は多いが、いわゆる「お宝」レベルの資料は多くないとの説明を受けた。

過去の蔵書状態調査。なし。ただし過去にインベントリー調査を実施。

利用不可の資料の有無：虫くい激しい和古書 1 点＋和雑誌類。和雑誌類は経年劣化が著しい。

2 書庫（保管場所）

貴重書等保管のアーカイブズ・セクションは 24 時間空調。その他は空調なし。アーカイブズ・セクションに配置されない和古書は外光の射す書庫（書架）に配置。それには主として集密書架を閉じることで対応。また部分的に封筒、箱に収納することで対処。

容器：封筒、箱（木、ボード）、帙、新刊書の外函利用。ほかに慶応大学図書館員（研修留学）による和古書を中性ボードに挟み、布紐で閉じる方法による保護。

貴重書、準貴重書ともに、裸の和古書を縦置きにしているケースが目立つ。

3 資料の取り扱い

職員に対する教育は進んでいるように見受けられた。例をあげるとアーカイブズ書庫でネガフィルム、ガラス乾板収納引出を見ているときに、出納スタッフに「ガラス乾板などをみるなら手袋をするように」の注意を受けた。こうした点は大いに評価できる。

しかし他方、図書館全体として、図書等が書棚上に斜め置きになっているケースが多く見られた。

4 環境

照明：電子センサー使用により光線暴露（exposure）を最小限にしているなどしている。しかし貴重書庫の照明は紫外線防止（UV カット）蛍光管ではない模様。また集密書架（閉じると外光が入らない）で対応している外光入光問題は課題。

虫・カビ害：虫食い図書はあるが同館収集以前の時期のもの。同館書庫での虫・カビの被害はないと理解した。

5 コンサベーション

図書館として必要な補修・製本：簡単なものは館内スタッフが処置、そうでないものは館外製本業者に外注している。

ただし図書館に保存担当セクション（係など）が確立していない模様。例をあげると同館担当司書の管轄下の和古書本で傷みのあるものを近隣の大学 MA 卒業プロジェクトに協力して資料を出したことがあった。そこで手当てを受けた和古書の処置記録は担当の手元で保管しているが、例え分散管理するにしろ、館全体としてより統一的に取り組む必要があるように思われた。

6 防災計画

図書館として資料の防災計画はない。ほかにセキュリティ上の課題あり。

7 資料の利用

利用頻度：コーニッキ目録、文献紹介（論文掲載の参考文献など）等により利用あり。ただし、全体としてあまり多くない。その点で、利用が少ない→予算は割けない→サービスも保存も進まない、のネガティブ連鎖となり易い。それをどう逆転させるかが課題。

目録整備／OPAC：目録不整備の図書なし。ただしネット公開は『コーニッキ目録』掲載分のみ。

□ 所見

和古書保存に関して、同図書館全体として考慮すべき点と個別に和古書管理に関する事項の2つの観点で所見をまとめた。2つの観点は当然、重なる箇所があるが、今後の方策上、区別するのが実践的と考えた。

1 BBBB 図書館全体の課題として

- ・保存担当者（部署）の確立。それにはどのセクションかに保存業務の全体的管理を所掌されることが一案。それによりコンサーベーション・補修だけでなく、保存計画の策定、デジタル化との連携、書庫環境整備などの実施を館全体として進めることが可能になる。

- ・保存担当者（部署）のもとで、保存方針の策定、保存計画の立案、資料防災計画の立案、資料管理、環境整備、職員・利用者教育等が実施されることが望ましい。

- ・環境整備には書庫等の温湿度測定、（特に貴重書書庫の）紫外線防止照明器具の使用も含まれる。

2 和古書等の管理に関して

1) 和古書

- ・「お宝」が少ない点に留意。和古書全体のデジタル化は意味、意義が小さいと思料する。

- ・現実的にすべきことの第一は和古書の保存容器収納。もともと横置きが基本の和古書を縦置きに排列することに難がある。さらに和古書の多くが帙に収められておらず保管状態が悪くなっている。縦置きに排列するには帙などへの容器収納が不可欠。帙に替りうるものが中性ボードの保存箱・保存封筒。保存容器は資料の化学的、物理的、生物的保護に役立つ。

・数は少ないが木箱収納の和古書についても留意が必要。それらは箱ごと横置きにするか、それができないなら木箱中の和古書がしっかりと立って保護される工夫が必要。(例えば、保存箱に一度、収納した後、木箱に入れて縦置きとするなど。)

・慶応大学図書館員による中性ボード挟み法は簡素、簡便で魅力的。但し、書架に並べた時にボード(カバー)の閉じ紐が邪魔になり隙間ができないか、の検討が必要。また和古書を中性ボード挟み法で保護した場合、書架全体の見映えも考慮すべき点かと考える。「見映え」は資料保存の観点では二次的だが、資料取り扱いスタッフ、閲覧者に一定の影響をもつ。また外部支援者(資金提供者)に対しては、「見映え」は重要なファクターとなる。

・現時点では、通常の保存容器(箱、封筒等)に和本単位数(帙収納の場合と同じ)ごとに収めるのが最良案。その場合に必要とされる容器数を算定すること。またそれにもとづき経費を算定すること。

・図書館資料保存関係の企業: Conservation by Design 社、Conservation Resources International, UK 社などが定評あり、信頼できる業者。経費、容器の形態(体裁)等についてこれら企業に相談するのも一案。

・その費用を通常予算に組み入れることが難しければ、外部に対する支援要請が必要。日本の財団あるいは在英企業等がその候補。そのためにも必要経費(人件費含む)を算出すること。

・虫損により利用不可の和本への対応: 代替利用手段(複製、他機関所蔵等)があれば、箱に収納して利用不可とするのが妥当。その補修の優先順位は高くない。

2) 和雑誌

和古書でないその他の日本研究コレクションについても、保存の観点で課題となる資料群について意見交換した。

・同図書館で課題として挙げられたのは経年劣化が著しい和雑誌。

・資料保存の選択肢を検討する場合、資料(群)の価値(value)、状態(condition)、利用頻度(use)の3要因をメルクマールとするのが一般的である。当該図書館所蔵和雑誌の場合、資料の状態は経年により著しく悪い、利用はあまり多くないことが判明している。価値については、同図書館として(長期に保存すべき)重要な資料群か、英国内で同資料群を所蔵している図書館があるか、複製(デジタル化含む)があるか等が判断基準となる。関連して言うと、国立国会図書館は和雑誌デジタル化を進めている。その世界に向けた公開・提供は現時点では未知数だが、こうした動向も注視しておく必要がある。

・和雑誌類の保存は直ぐに答の出せる項目ではないが、引き続き検討を要する重要課題としてここに記した。

3) マイクロ資料

・同図書館所蔵和書関連マイクロ資料は良好な環境に置かれており、健全な状態にある。しかし、もしこれまでできていないなら、以下の実施が望ましい。①マイクロ資料の支持体(ベース)がTAC(三酢酸セルロース)かPET(ポリエステルテレフタレート)かを識別すること、②TACベース・フィルムの場合は状態診断をすること。TACフィルムの診断調査には以下を参考のこと。

“A-D strips”. <http://www.imagepermanenceinstitute/imaging/ad-strips>

4) 利用のための保存

・資料保存の目的は継続的利用を保証することにある。その点から、和古書等コレクションの利用向上のための方策考案と努力が重要。利用が些少では種々の予算も認められ難く、存在意義が弱くなりがちになる。まずは目録類がネット・アクセスできるようにすること、コレクション紹介を大学内外に広範に行うことなどが必要な方策と思料する。

CCCC 研究所 DDDD 図書館

訪問対応者：DDDD 図書館司書

訪問者・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

1 図書館とコレクションについて

DDDD 図書館は日本美術・芸術専門図書館。ワンパーソン・ライブラリー。和古書はさほど多くない。

和古書は書庫で保管。空調はないが、温度・湿度環境は良好。虫・カビ問題も生じていない。

2 和古書（古書、地図、版画、写真等）の保存

1) 全体として状態は良好。また良識的に保管・保存されている。

2) しかし仔細に観察・考察すると以下を指摘できる。

- ・照明についての配慮を欠いている模様。照明器具としては UV カットの蛍光灯を使用するか、UV フィルター付加が必要。（この点は、資料配置の閲覧室、事務室も共通。）

- ・書庫内は除湿機のみ稼働で、暖房、冷房ないのは妥当。しかし事務室、閲覧室は日中のみ空調稼働。これでは日々、事務室、閲覧室においては温度・湿度が大きく変動していることになる。これは保存上、資料に多大の負荷を課すことになる。空調を 24 時間稼働に変更することはできないだろうから、閲覧室・事務室配架資料のうち重要な図書等は書庫に移動させるのが良いと思料する。例。L コレクション、C コレクション、B コレクションなど。

- ・今後のために、かつ自身の保管環境を知っておくために、書庫内温度・湿度の年間測定をしておくべき。温度・湿度計としてはデータロガー（data logger、温度・湿度記録計）がお勧め。

- ・資料には安定した包材を使用すること。保存箱内にニグニン含有の新聞紙を入れたりするのは不可。また組成不明の気泡緩衝材（プチプチ・シート）なども使用不可。

- ・和古書を書棚に横置きにしているのは良。しかし資料を裸のまま保管の点は改善が必要。資料が裸のままでは光、チリ・埃の害にさらされやすく、かつ取扱いの際に傷めやすい。とはいえ、1 冊ずつ保存箱に収納するほどの資料ではない。それで、数冊まとめて既成の保存箱に収納することを推奨したい。各冊を別々に既成（レディ・メイド）の中性紙封筒に収納する方法もある。

- ・資料に触れるものは必ず acid-free（中性あるいは弱アルカリ性）、lignin-free（リ

グニン非含有)の紙、ボード(ボール紙)を使用すること。容器のほか、本に挟む「しおり」なども同様。

- ・保存容器関連では、カスタム・メイドしてくれる企業を発見・開拓すること。例えば Conservation Resources International UK 社、Conservation by Design 社など。

- ・個々の資料について：CB の日記、文書等の取扱いに特別の留意が必要。

- ・縦置きした図書は必ず書棚にまっすぐに立てること。

3 利用と保存

- ・図書館資料の保存は利用のためであり、一方、資料が利用されるためには保存が不可欠。この両者の関係に十分に留意すること。

- ・同図書館は重要な日本美術資料を豊富に有するが、その活用については開拓の余地があるように思われる。研究所の設置場所の問題もあろうが、資料の閲覧利用は比較的少ないように見受けられた。この点で各段の努力が重要。また L コレクション、C コレクション等では、広く世に知らしめて、閲覧・展示等での活用の途を開くことが肝要。同館所蔵史資料の利・活用増進に「過激に」に取り組むことを期待したい。保存の意義がそこから現れる。

EEEE 大学 FFFF 図書館

訪問対応者：FFFF 館附属日本研究図書館担当

訪問者・報告者：安江明夫（資料保存研究者、学習院大学非常勤講師）

1 蔵書概要

長い歴史を誇る FFFF 附属図書館の現蔵書数は約 14 万冊。うち日本語の写本等約 100 種、和装刊本約 1000 冊。

2 全体状況

世界でも有数の歴史と蔵書を誇る FFFF 本館は、その蔵書の保管環境整備、保存処置、利用者への取り扱い教育等をしっかり実施している。この点は同附属館においても同様である。

FFFF 本館は蔵書保存に優れた見識を有し、それに基づいた施策を実施している。保存方針及び保存計画の策定と実施、資料防災計画の策定などにそれが伺える。

また基本方針・内容・規模が優れた保存部（Conservation and Collection Care Department）を設けており、特に近年、体制が整備され、かつそのなかで予防的保存を重視した方策を実施している。書庫・閲覧室・展示室等における徹底した総合的温度・湿度コントロール・システムが予防的保存策の一例である。

別に、同附属館所蔵マイクロフィルムの保存状態調査（検査）を実施したと聞いたが、こうした点にも FFFF 本館の全館的保存方策の計画的実施が見られる。

こうした方策と処置及び附属館側での取組みにより、日本資料（蔵書）の全体的状態は大変、良い。保存部との連携も円滑で、この点も特筆される。和装本などでは洋装本と異なる保存処置また異なる形態の保存箱が必要となることがあり、それゆえこのような両者の関係はとりわけ重要である。保存部に和装資料補修の技術及び経験の蓄積があることも素晴らしい。

3 幾つかの課題

以下、気づいたことを記す。

1) 貴重書の書庫・閲覧スペースの人工照明に普通の蛍光灯を使用している。これは紫外線を出さないタイプの蛍光灯に切り替えるかまたは UV カット・フィルターを装備することが必要ではないか。

2) FFFF 本館全体として気づいた点であるが、書棚に本がしっかり縦置きにされず、斜めに倒れかかるケースが散見された。同附属館においても同様のケースが見られた。些細なことのようにだが、書棚上の図書・資料の保管状態は重要で、職員・利用者双方が十分に留意すべき点である。

4 その他として

(以下は同 FFFF 図書館に直接関連するテーマではないが、在欧日本資料保存機関全体に関するものとして、調査訪問をした各館の担当者と話し合ったことを整理しておく。)

- ・英国内の JLG, OJAMASG あるいは EAJRS で、資料保存関連の情報交換。経験交流等のネットワークが進展することを期待したい。それにより、信頼できる保存箱作成業者のリスト化、保存材料の調達、和古書の取扱い、洋装仕立て和装本のデジタル化等で、前進することが期待できる。

- ・こうしたネットワークは日本の関係機関、財団等との連携・協力の梃あるいは促進剤となる可能性を有する。

- ・EAJRS 和古書保存 WG ページに資料保存問合せ先リストを作成すること。これには在欧機関・専門家とともに日本の以下のような機関・団体・専門家をリスト化し、必要があればいつでも問合せできるようにする。

機関としては国立国会図書館資料保存課、国立公文書館修復係、東京文化財研究所など。団体としては日本図書館協会資料保存委員会、NPO 文化財保存支援機構、情報保存研究会 (JHK) など。個人としては増田勝彦氏 (紙資料保存専門家、元昭和女子大学教授)、木部徹氏 (資料保存専門家、(株)資料保存器材・代表取締役)、白岩洋子氏 (写真保存専門家)、安江明夫 (資料保存研究者、学習院大学非常勤講師) など。

- ・FFFF 館で実施している和装本に対する保存処置あるいは適用している保存箱形態、保存資材調達情報などを英国内あるいは欧州内で共有できるようにすること。

- ・この点は在欧日本資料保存機関の多くがワンパーソン・ライブラリーである現状から、特に重要であり有用と考える。

- ・また GGGG 大学図書館所蔵和装本は以前に洋装に改装され、そのために資料デジタル化の際、本の開きが悪くそのままではデジタル化が困難となっている。同図書館にもごく僅かだが、そのような和装本がある。こうした場合にどのような処置を講ずるのが良いかを調査研究し、その結果を国内・地域内で共有できるようにできないものか。各所でデジタル化が進捗している現況に鑑み、重要なテーマと考える。